様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

その他、学校や地域の実情に応じた取組

岩見沢市立東光中学校
岩見沢市立東小学校・岩見沢市立岩見沢小学校

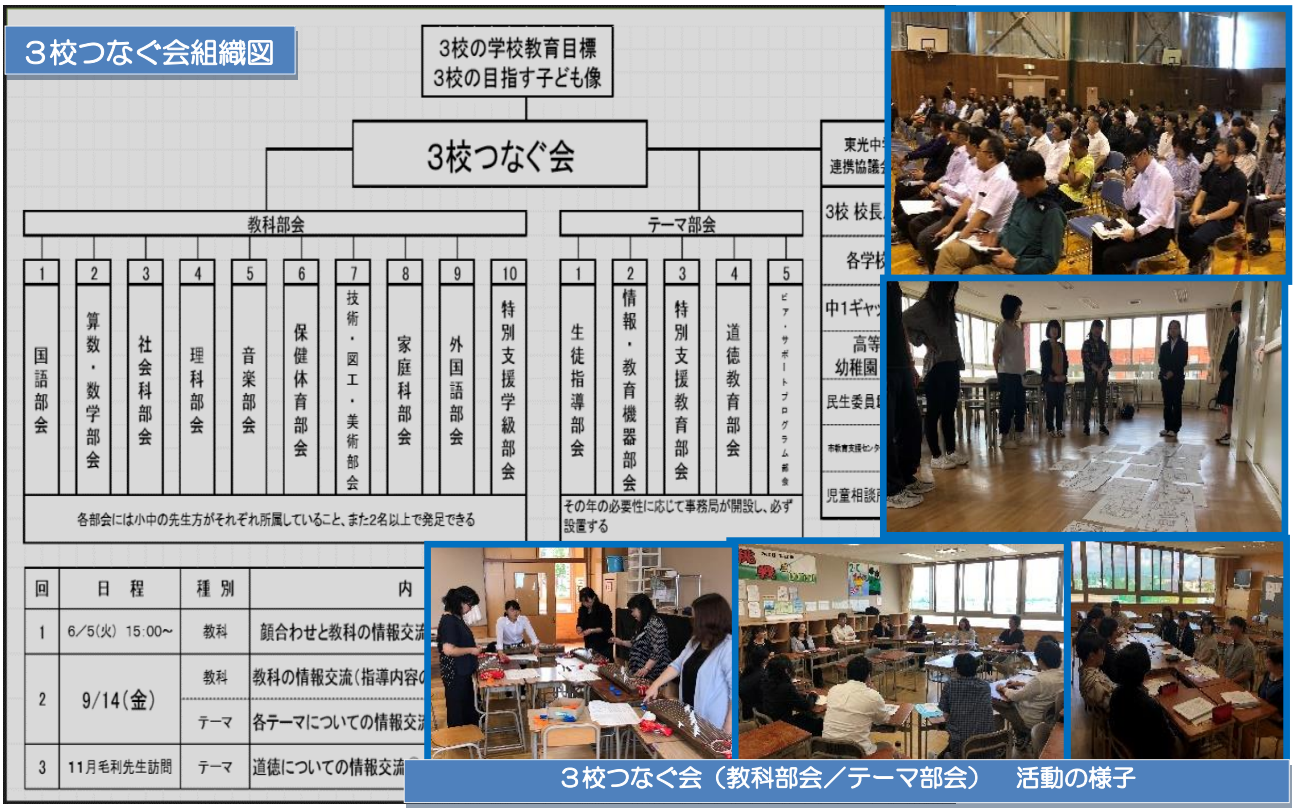
効果的な取組とするためのポイント

中１ギャップ問題解消及び未然防止の土台となるのは、中学校区の連携・協働した組織体制が重要であることから、中学校区の教職員で構成する東光校区「３校つなぐ会」（教科部会・テーマ部会）を組織した。

取　組　の　実　際

１　東光中学校区「３校つなぐ会」の取組

中学校区の子どもたちが安心して学校生活を送るための取組を検討する「３校つなぐ会」を組織し、学習における小・中学校の円滑な接続について検討する「教科部会」、小中連携における諸課題の解決について検討する「テーマ部会」を設置した。これまでの中１ギャップ担当教員を中心とした取組から、全教職員の参画による取組に移行したことにより、取組の意義や目的等について全教職員の共通理解が深まるとともに、中１ギャップ解消に向けた持続可能な取組となることが期待される。



２　「情報モラル」乗り入れ授業の実施

小学校５・６年生を対象に中学校教員による「情報モラル」の乗り入れ授業を行った。中学校と同様の学習内容にしたことにより、継続的な指導となるよう工夫した。

成果（○）と課題（●）

○　「３校つなぐ会」が組織され、連携の土台ができたことにより、小・中学校で一貫した取組の必要性について共通理解が図られるなど成果が見られた。

●　持続可能な取組となるよう、実施時期、内容等を各校の年間計画に位置付ける必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

生活リズムや家庭での過ごし方等に関する家庭との連携の充実

滝川市立明苑中学校
滝川市立滝川第三小学校・滝川市立東小学校

効果的な取組とするためのポイント

中学校区３校の子どもたちの生活習慣の確立に向け、生活リズムや家庭学習習慣の定着を図ることの重要性について家庭や地域に発信するとともに、外部講師による情報モラル学習を実施するなどの取組を行っている。

取　組　の　実　際

１　学習・生活習慣定着への情報発信

中学校区３校の傾向として、生活リズムの乱れから不登校になる児童生徒が多く見られることから、生活習慣や学習習慣の確立に向けた保護者・地域住民向けの通信を発行し、周知に努めている。通信の発行に当たっては、長期休業期間や学校行事等に合わせ、定期的に発行したことにより、保護者の意識に変化が見られ、学校と家庭が連携した取組につながっている。

明苑中　滝川第三小　東小
連携だより
平成３０年１１月７日発行
第３号
（発行者）中１ギャップ問題未然防止事業推進校
明苑中学校　校長　吉本　千裕

学習環境づくりにご協力を!!

■学習する時間帯を決めましょう
■家庭学習の間は携帯・スマホ・ゲームを保護者に預けましょう
■保護者のみなさんからの励ましをお願いします

お子さんが家庭学習を集中して行うためには、学習時間を決めたり、携帯・スマホ・ゲームについての約束事を決めるなど、具体的な取り組みを実行することが大切です。また、お子さんの学習時間中は保護者のみなさまもテレビやスマホを見る時間を控えたり、お子さんの努力を見取ってあげるなど、保護者の皆様のご協力をお願いいたします。

なお、各ご家庭において、すでに約束事を決めたり、お子さんの学習環境づくり行っている場合についてはこの限りではございません。

家庭学習強調週間

１１月７日（水）～２１日（水）　２週間

ご家庭のご協力を得ながら、小・中学校が連携して家庭学習習慣の定着を目指した取り組みを進めてまいります。
今回は、明苑中学校の期末テスト２週間前から小・中学校で共通して家庭学習を強化しようという取り組みです。中学生は２時間以上、小学生は普段よりも長い時間の家庭学習への取り組みにご協力をお願いします。

学校で学習した内容を定着させるためには、復習がとても大切です。その復習を行うのが家庭学習になります。
明苑中学校では、１１月２１日（水）２２日（木）の２日間で第２学期の期末テストが行われます。中学生になると、定期テスト２週間前迄にテスト出題範囲表が配付され、テストに向けて計画的に取り組むことになります。
小学校のテストの取り組みとは異なりますが、特に小学校６年生にとっては半年後には中学生になり、人ごとではありません。家庭学習習慣の定着に向けて、小・中学生が共通して取り組む試みとなります。

【連携だより　秋発行】

東の鐘
平成３０年５月１７日
学校便り　第２号
滝川市立東小学校

早寝　早起き　朝ごはん　そして家庭学習
校長　髙　麗　正　次

５月１９日（土）の運動会まで、あとわずかの期間となりました。１日からは運動会特別日課がスタートし、各学年の練習も熱が入ってきています。この運動会の取組を通して、子供たちにはしっかりと目標をもち、最後まで一生懸命頑張る強い心を育ててほしいと願っています。６日からは全体練習が始まります。日々の練習で子供たちも体に疲れが残る頃かと思います。睡眠時間や食事を十分に取るなどを心がけ、健康には十分ご留意くださいますようお願いいたします。短い練習期間ですが、日頃の体育活動の成果だけではなく、集団行動などの社会性、高学年の運動会係活動における自主性などにも目を向けていただきたいと思います。子供たちと先生方が一体となって目標に向かって取り組んでいます。是非、ご家族揃っておいでいただき、お子様の元気な姿・成長した様子をご覧ください。

さて、標題の『早寝　早起き　朝ごはん』は、子供の健やかな成長を家庭で支えるために日本ＰＴＡ全国協議会など、青少年の育成にかかわる様々な団体が主体となって全国的に取り組んでいる運動です。
朝ごはんをしっかり食べて登校する子供は、学習に取り組む集中力が違います。全国学力学習状況調査の結果からも、朝ごはんを食べていない子よりも学力が高いと分析されています。また、早寝・早起きは子供の生活リズムを整え、内臓の働きを良くし、より健康的な心身の成長につながります。当然、体調の善し悪しは、子供の活動のあらゆる場面に影響してきます。
もちろん、子供の健やかな成長は「勉強ができて、いつも元気であればいい」というだけではありません。優しさや公平さ、友達や周りの人への思いやりや一生懸命さ、目標に向けてねばり強く取り組む強いゆなど感性豊かな心を育てることもとても大切なことです。『早寝　早起き　朝ごはん』の取組は家族の愛情を感じながら、心豊かな子供を育むことにもつながるのではないでしょうか。

子供が健やかに成長していくためには、適切な運動と栄養のバランスのとれた食事、十分な休養と睡眠が大切なことは多くの大人が理解していることです。しかし、「わかっちゃいるけど、なかなか・・・」「遅くまで仕事をしていたりして、どうしても子供の生活時間と合わせられなくて・・・」ということが日常の生活場面においては生じてしまうのが実情かも知れません。それでも何とか工夫して「この日だけは」「これだけは」とできることから取り組んでいければと思います。

家族の絆や家庭で共に過ごす時間を大切にすると共に、生活習慣を整え、そして学びの習慣を身につけた子供たちは、自分の可能性をより広げることができます。子供たちの将来のために『早寝　早起き　朝ごはん　そして家庭学習』という、家庭で今できる取組を通して、子供の成長を支えてくださいますようお願いいたします。

【小学校便り　春発行】

２　外部講師を招いての情報モラル講座

不登校の原因の一つにネットトラブルによる人間関係の悪化が挙げられることから、外部講師による情報モラルに関する講演を実施している。実際のトラブルの事例や、トラブルに巻き込まれないための未然防止の方法等についての説明を通して、子どもたちは理解を深めることができた。

【ネットモラル講座の様子】

成果（○）と課題（●）

○　中学校区３校の統一した取組として、生活習慣や学習習慣の確立に向けた通信を繰り返し発行した。

○　専門家を外部講師とした講演会を行うことにより、子どもたちはネットモラルの重要性について理解を深めることができた。

●　ネットトラブルの根絶に向け、家庭・地域住民に生活習慣の確立やスマートフォンのルールづくりについて発信する必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協力した取組の工夫

石狩市立樽川中学校・石狩市立南線小学校

効果的な取組とするためのポイント

不登校の未然防止に向け、全ての児童生徒が自己肯定感や自己有用感、充実感を得られる「居場所づくり」に努めている。そのため、児童生徒と地域住民が一緒に活動する機会を設けるとともに、ＰＴＡと連動し、学校と家庭、地域が連携して様々な活動に取り組む基盤を整備している。

取　組　の　実　際

１　児童生徒の「居場所づくり」につながる小中合同清掃活動の実施

児童生徒を町内会単位のグループに分け、校区内の清掃を実施した。中学生が、グループの小学校第６学年児童に温かい声をかけたり、リーダーシップを発揮しながらグループをまとめたりするなど、小学生の手本となる機会を設定することにより、児童生徒が自己肯定感や自己有用感、充実感を得られる「居場所づくり」に努めている。また、町内会などの地域住民も参加し、児童生徒と地域住民が交流を深めながら活動した。地域住民から声をかけていただくことも児童生徒に自己有用感をもたらし、「居場所づくり」につながっている。これらは、中学校の教育課程の一環であり、小学生にとっては、中学校の授業を体験できる貴重な機会となっている。

２　家庭と連携し、情報モラルを身に付けさせる取組

非行防止教室や携帯マナー教室、新入生の入学説明会など、様々な機会において、警察や携帯電話会社の講師を招き、児童生徒や保護者を対象とした情報モラルに関する講話を開催した。携帯電話やスマートフォンの使い方、実際に起きたトラブル等を具体的に学び、社会生活上のルールやマナー、他を思いやることの大切さについて考えさせる取組を進めた。

３　学校と家庭、地域が一体となったＰＴＡ活動の取組

(1) 登下校時における交通安全指導や祭典の巡視

通学路の交通安全指導や地域で開催される祭典の巡視を家庭や地域に呼びかけ、協働して取り組んだ。学校と家庭、地域が一体となって取り組むことにより、児童生徒の実態や課題等について共通理解を図った。

(2) 「いしかりふれあいＤＡＹ」における生活改善に向けたチラシの有効活用

家庭での学習習慣や望ましい生活習慣の確立をねらいとして、家庭へチラシを配付し、家庭での学習時間の確保や携帯電話等を使用する時間の制限などを働きかける取組を行った。また、地域住民に対しては、学校便りで周知するなど、働きかけを強化した。

成果（○）と課題（●）

○　学校と家庭、地域が連携を図ることにより、従来、見過ごされがちな情報を広く知り得ることができ、指導の工夫改善につなげることができた。また、児童生徒に多くの大人に見守られているという意識をもたせることにより、生活改善を促したり、心の安定を与えたりすることができた。

●　情報モラル教育については、家庭の協力が不可欠である。家庭学習時間や携帯電話やスマートフォン等の利用について、家庭との連携を図るために、加配教員や生徒指導主事が中心となって、小・中学校の教員を対象とした研修の充実を図り、家庭に対する働きかけを強化する必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まないための未然防止の取組

円滑な小中接続の取組

小樽市立朝里中学校
小樽市立朝里小学校・小樽市立豊倉小学校

効果的な取組とするためのポイント

小学校から中学校へ円滑に接続し、義務教育９年間を見通した教育活動ができるよう、校内支援体制の整備を図るとともに関係機関とのネットワークを活用し、環境の変化に対応できる児童生徒を育成する。

取　組　の　実　際

１　小学校から中学校へ円滑な接続のために

小学校から中学校への大きな環境の変化に不安を感じる児童は少なからずいる。本校では、児童生徒を９年間のサイクルで指導・支援するという視点の下、小・中学校間の情報交流や指導の共通化に努めた小中連携教育を推進している。小学校時代にやや不登校傾向にあった児童の情報は詳細に中学校へ引き継がれ、適切な受け入れのための準備や対策がなされた。また、入学後の状況も小学校と情報交換するなど、小中が互いに連携を取り合った取組を展開している。

２　環境の変化に適応できる生徒の育成のために

例年よりも早い10月の時期にオープンスクールを開催し、児童や保護者に本校の概要を説明したり、学校見学等の場面を設定した。実施後のアンケート調査では、「中学校の様子がよくわかった」・「意識が芽生えた」などの意見が多数寄せられた。また、今年度は中学校で実施した実用英語検定に小学生も参加するなど、幅広い形の連携ができつつある。

在校生に対しての取組としては、生徒理解の必要性から「ほっと」・「ほっと　プラス」を数回にわたって実施している。客観的な分析や経時比較などを通して、望ましい人間関係の構築はもちろんのこと、好ましい生活習慣の定着、学習指導や生徒会活動・学校行事等のあらゆる場面まで個に応じたきめ細かな指導を実施し、学校や環境の変化に適応できるような予防的な不登校対策を行っている。

３　校内支援体制の整備と関係機関とのネットワークの活用

児童生徒が不登校になる要因や背景は複雑化・多様化している。児童生徒を多面的にとらえるために、情報交流や授業交流の場面を定期的に設定し、不登校を未然に防ぐための支援体制を整備している。これにより、一人一人の生徒の状況や実態を早期に発見することができ、複数の教職員による早期対応やスクールカウンセラー等の関係機関とも連携をとった対策をとることができる。また、長期休業には小・中学校の教職員による合同研修会やスクールカウンセラーを招いた研修会を開催し、不登校を未然に防ぐための効果的な指導やカウンセリングの手法を研修するなど計画的な取組を展開している。

成果（○）と課題（●）

○　２年目となり、加配教員を中心として、年間を見通した活動が定着しつつある。

●　早期から不登校になっている生徒への指導の継続と充実を急ぐ必要がある。

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協力した取組の工夫

共和町立共和中学校・共和町立東陽小学校
共和町立北辰小学校・共和町立西陵小学校

効果的な取組とするためのポイント

幼児センターから小学校、小学校から中学校へと円滑な接続を目的として、それぞれの担当者で組織されている「特別支援教育連携協議会」と連携し、幼児児童生徒に係る情報交流を行った。

また、児童の自尊感情や自己有用感を高めていくことを目的に、青少年育成協会や食育推進委員会と連携した各種事業を展開しているほか、異校種交流などを積極的に行っている。

取　組　の　実　際

１　特別支援教育連携協議会との連携

本町では幼児センターから小学校、小学校から中学校と、それぞれの円滑な接続を目的として「特別支援教育連携協議会」を設置・開催し、児童生徒の情報交換を行うことで、それぞれの情報が共有・引き継がれ、受入れのための準備や対策が円滑に進んだ。このほか、入学後の状況についても情報交換するなど幼児センターから中学校まで一貫した取組となるよう努めている。

２　朝の呼び掛け・声掛け運動の実施

児童が地域住民から認められる機会を増やし、自尊感情や自己有用感を高めることを目的に、町青少年育成協会や町食育推進委員会が主催して、町内全戸に設置されている防災無線による朝の呼び掛け・声掛け運動を実施している。小学校第６学年の児童が朝の定時放送で交通安全を呼び掛けたり、毎月の食育の日には「早寝早起き朝ご飯運動」に係る呼び掛け・声掛けを行ったりするなど、児童の達成感や充実感を感じることができる場を工夫している。

また、地域住民と触れ合う機会を増やし、児童生徒に自分が見守られているという安心感をもたせることを目的に、町食育推進委員会が「ふるさと給食」の際に各学校を訪問し、給食の時間を一緒に過ごすなど地域一体となった取組を推進している。

３　異校種交流

児童に豊かな体験活動や達成感・充実感の醸成の場とするため、町の一大イベントである「共和かかし祭」において共和高等学校生徒とともに児童が「よさこい」及びダンスパフォーマンスの披露を行った。

毎年多くの来場者が訪れ、見学している中での披露は児童にとっては非常に緊張感の高いものではあるが、披露後の児童の達成感・充実感は非常に大きく自己有用感を高める教育活動の場となっている。

成果（○）と課題（●）

○　既存組織である「特別支援教育連携協議会」を活性化・連携することにより、本事業の充実につなげることができた。

○　「朝の呼び掛け・声掛け」や異校種交流など各種事業で、児童生徒に達成感や充実感を感じさせることができるとともに、地域と連携した取組を推進することができた。

●　北海道共和高等学校閉校に伴い今後の新たな活動を検討したり、「特別支援教育連携協議会」に加配教員が中１ギャップ問題未然防止の視点で関わったりするなど、本事業とより連携していく必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

不登校傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実

室蘭市立桜蘭中学校・室蘭市立知利別小学校
室蘭市立旭ヶ丘小学校・室蘭市立八丁平小学校

平成29年度から「人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善」に加え、「Q-U」を活用し、学期毎に学校生活不満足群や非承認群に位置する生徒を学年で確認し、具体的な指導の手立てを検討し、学級担任と校内支援コーディネーターが連携して不登校児童生徒を生み出さない取組を行っている。

取　組　の　実　際

１　「Ｑ－Ｕ」による不登校生徒の早期発見、早期対応

生徒一人一人が学級内で置かれている状況の把握は、学級担任の観察に頼るところが多かったが、「Ｑ－Ｕ」を活用することにより、学級担任の観察とは違った視点で客観的に把握することができるようになり、非承認群や不満足群に位置する生徒の見取りをより正確に行い、早期の段階で対応することができるようになった。

○　「Ｑ－Ｕ」の学期毎の実施
○　個人分析結果を基にした指導方針と方策の設定

２　「生徒指導交流会」における「Ｑ－Ｕ」の活用

「生徒指導交流会」において、生徒の顔写真をスクリーンに投影しながら、生徒の学校生活の状況や課題等を説明し、全教員で共通理解を図り、「Ｑ－Ｕ」のプロット図を使いながら個に応じた指導方法を検討し、課題解決に向けた指導方針を確認した。

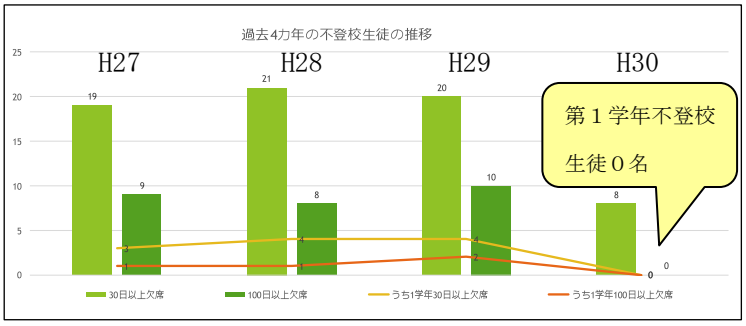
○　学期毎に「生徒指導交流会」を実施
○　「Ｑ－Ｕ」による生徒の課題把握、改善に向けた具体策の実施

３　校内支援コーディネーターの配置

学級担任の力量に頼った不登校傾向にある生徒へ対応を止め、平成29年度から校内支援コーディネーターを配置して、不登校のメカニズムの研修会を行ったり、関係機関との連絡調整役となったりするなど、不登校生徒の支援の充実に努めた。

４　取組の成果

児童生徒の人間関係づくりの能力の育成や小・中学校の連携の促進、校内の組織的な対応等による児童生徒の新たな不登校を生み出さないための取組により、平成30年度の第１学年の不登校生徒は０名となった。



【中学校の不登校生徒数の推移】

成果（○）と課題（●）

○　新たな不登校を生み出さない取組により、中学校の不登校生徒数が減少した。
●　経験の浅い教員でも、不登校児童生徒の支援に向けた取組に見通しをもったり、組織的に対応したりできるよう、研修等を通して教員としての資質向上を図る必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

不登校傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実の取組

新ひだか町立静内中学校　新ひだか町立静内小学校

効果的な取組とするためのポイント

中学校入学前に抱いている不安を取り除くために、中学校での様子を中学校の行事参観や２月の入学説明会で体験授業を行うなど、小学生段階で実際の体験から入学後の自分自身を具体的にイメージできる取組を通してギャップに対応できる力を育てていく。

校内不登校対策委員会が中心となり、不登校生徒及び不登校傾向が見られる生徒に関する個別の「支援計画表」を作成し、教職員全体で指導する体制整備を行う。

取　組　の　実　際

１　中学校「合唱交流会」の６年生参観

毎年中学校の第２回参観日（７月中旬）に行われている合唱交流会を推進校の６年生が参観し、中学生が真剣に行事に取り組む姿やレベルの高い合唱を見ることで、これまでの自分たちの行事への取組を振り返り、今後の小学校行事への取組を向上させていく気持ちをもたせること、そして中学校に入ってから自分たちがどのようなことをしていくのかを具体的にイメージできるよう実施した。

＜合唱交流会　小学生感想から＞
- 中学生になると格段に歌のレベルが上がることがわかった。聞いていてそれぞれを楽しめてとても感動した。
- 中学生は小学生と違って先生に注意されるところが一切なかったので、自分もそうしたいなと憧れました。
- 早く中学生になりたいと思いました。

実際に参観した感想から、合唱の技術面だけではなく、歌っている時の中学生の姿や見ている時の姿勢、様子に至るまで小学生である自分たちと比較して参加していたことが分かった。また、２学期に行われた小学校の学習発表会の取組にも参観した体験が生かされていた。

２　不登校対策委員会が中心となった個別の支援計画を用いた情報共有と指導体制の確立

校内不登校対策委員会は主幹教諭がチーフとなった組織で、今年度から中１ギャップ担当も委員会の一員となり中１ギャップ問題の対策と一体化して取組を進めてきた。特に今年から、スクールカウンセラーのアドバイス及び平成 29 年３月に道教委から出された「不登校児童生徒への支援の在り方」を参考に、不登校及び不登校傾向にある生徒についての「支援計画表」を作成することとした。それにより、長期・短期目標を設定しながら、対応の経過を担任及び生徒や保護者の対応に当たった教職員が記録し、閲覧することができるようにして教職員全体での指導体制を整備してきている。

成果（○）と課題（●）

○　行事参観は、小学生自身が中学校に入学してからの自分の姿を具体的にイメージでき、さらに参観することでイメージできたことを、小学校での生活や行事の取り組みに生かすことができた点で効果的であった。

●　不登校対策の支援計画表の活用について、対策委員会としての取組と中１ギャップ防止担当で役割分担が明確にできない部分が見られた。年度当初に、両担当での計画立案段階での連携・検討が重要であった。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

小・中学校と家庭、地域が連携・協力した取組の工夫

長万部町立長万部小学校・長万部町立静狩小学校・長万部町立長万部中学校

効果的な取組とするためのポイント

小・中学校が共通で、家庭に向けて学習習慣の定着や望ましい生活習慣の確立について指導や働きかけを行うとともに、不登校傾向等の児童に関する情報交換会議をもち、早期に支援を行うことで、不登校の未然防止につなげている。

取　組　の　実　際

１　「家庭学習強調週間、ゲーム・スマホ等使用制限週間」の取組

長万部町では、家庭学習習慣の定着と望ましい生活習慣の確立をねらいとして、町内の小中高が連携し、「家庭学習強調週間、携帯・スマホ・ゲーム利用時間制限週間」の取組を年３回実施している。

新学期が始まる４月の上旬、中学校の定期テスト前の８月下旬と２月中旬に、全ての学校で保護者へ啓発するチラシを配布し、家庭学習時間の確保や夜８時以降は携帯等を保護者に預け、電子メディアに触れない時間を設けることなどを働きかけている。

２　中学校「１日体験入学」の実施

「中学校一日体験入学（１日日程）」では、体験授業、部活動見学に加え、長万部中学校の特徴の１つである全校生徒が食堂に集まる全校給食を体験している。中学生による給食の準備・片付けのサポートなど、上級生との関係構築のきっかけとなっている。

【小学生の感想】

○　「先輩たちの給食の準備や盛り付けがとても素早く丁寧で、とても勉強になりました。私も中学校に行ったら、あんなふうになりたいと思いました。」

○　「英語の授業でプリントをもらうときは『ありがとう』と言うことが勉強になったので、中学校に入学したら『ありがとう』と言うのを忘れないようにする。」

３　次年度の新入生（小学６年生）に関する情報交換会議

中学校での不登校を防止する取組は、小学校に在籍している段階からすでに始めることが重要との認識から、不登校傾向の児童に関する「第１回情報交換会議」を６月に実施した。小学校入学時からの欠席、学習、家庭等の状況について情報交換し、小中の教職員で個々の児童に応じた支援について協議した。その後の児童の状況については、「町不登校情報交換会議」で交流等を行っている。

成果（○）と課題（●）

○　小学校の段階で不登校の予兆を把握し、早期に対応・支援することが不登校の未然防止に効果的であることを共通理解し、情報交換等の取組につなげることができた。

●　携帯電話やスマートフォンの使用は学習・生活の双方に大きな影響を与えている。不登校の未然防止のためにも、家庭に対してルールづくり等の働きかけを工夫する必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

生活リズムや家庭での過ごし方（家庭での学習時間や、ゲームテレビの視聴、携帯電話、スマートフォン等の利用を含む）等に関する家庭との連携の充実
江差町立江差中学校
江差町立江差小学校・江差町立南が丘小学校

効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」による客観的データに基づく児童生徒理解と「生活に関するアンケート」によるいじめ等の早期発見を両輪に推進する。また、生活リズムの乱れにつながるゲームやスマートフォンの利用状況等を「ネット実態調査」を行い把握する。

取　組　の　実　際

１　「ほっと」の実施と分析～児童生徒のコミュニケーションスキルの把握～

５月と 11 月に「ほっと」の実施と分析を行うことで、児童生徒のコミュニケーションスキルの状況を客観的なデータで得ることができた。これを基に児童生徒の実態を交流したり、教育相談に生かしたりと、生徒理解と生徒指導の両方で活用することができた。

「ほっと」による「緊張」項目の数値の推移			
小学校平均		中学校	
５月	11 月	５月	11 月
49.5	54.3	47.7	47.8

江差中学校区で数値が低かったのは「緊張（不安）」の項目であった。質問用紙の文言では「友達にどう思われるか不安で本音で話すことができないことがあるか」、「緊張して人前で話すことができないことがあるか」と聞かれている。この値が中学校入学後に大きく低下しないよう、小学校の段階から交流を重ねて、新しい人間関係に慣れることが重要であると考えられる。

２　生活に関するアンケート～いじめ調査～

不登校の原因になり得る、いじめの早期発見を目的に「生活に関するアンケート」を実施した。「嫌な行為をされたことがある」、「嫌な行為を他人が受けていたのを見たことがある」、という項目にチェックをした児童生徒には迅速に聞き取りを行い、実態把握に努めた。

３　ネット実態調査

江差中学校区内では児童生徒の携帯電話・スマートフォンの所持率が高く、その使用に伴う生活リズムの乱れや家庭学習時間の減少が心配されている。そこで、全生徒を対象に「ネット実態調査」を行った。

その結果、「スマホ・ゲームなどの機器でインターネットを利用している」生徒が 94%。「インターネットに接続できる自分専用の機器を所持している」生徒が 59%、「家庭での利用に関するルールがない」生徒が 49%いることが判明した。そのため、江差中学校区トライアングルサポートでは共通ルールを設定し、各家庭にお知らせと取組のお願いをした。

①決められた時間に保護者へ預ける。（小学生は 21 時～、中学生は 22 時～）
②使用時間帯・使用時間を決める。

成果（○）と課題（●）

○　「ほっと」を利用することで児童生徒一人一人及び学級全体でのコミュニケーションスキルの状況を把握することができた。また、生活に関するアンケートでいじめの早期対応ができた。
○　ネット実態調査を行うことで現状を把握し、共通ルールについて確認できた。
●　コミュニケーションスキルの向上を目指して、個人対応にとどまらず、学級や学校単位でソーシャルスキルトレーニングに取り組む必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

新たな不登校を生まないための魅力ある学校づくりの取組
東川町立東川中学校・東川町立東川小学校
東川町立東川第一小学校・東川町立東川第二小学校・東川町立東川第三小学校

効果的な取組とするためのポイント

子ども支援ツール「ほっと」や「いじめアンケート」など、客観的な資料から児童生徒を多面的・多角的に理解するとともに、日常的な情報交換の場を設定したり、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携を図ったりしながら、役割分担や取組の検証を行う。

取　組　の　実　際

１　「ほっと」等、各種調査の分析結果を活用した教育相談の実施

・各小・中学校で子ども支援ツール「ほっと」や「いじめアンケート」など、客観的な資料から児童生徒を多面的・多角的に理解することができ、自校での教育相談や教育活動において、児童生徒に寄り添ったきめ細かな指導を充実させることができた。また、日常的な情報交換を大切にするとともに、生徒指導事例研修会等でスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携を図り、役割分担や取組の検証を行っている。

２　人間関係づくりの能力の育成を図る児童会・生徒会の取組

・新たな不登校を生まないためには、児童生徒一人一人が、「かけがえのない存在として大切にされている」、「認めてもらえている」という思いを抱くことができる集団をつくる必要がある。そのため、子ども支援ツール「ほっと」等を活用して集団の状態を客観的に捉え、教職員で共通理解を図るとともに、よりよい人間関係の構築に向けて、児童生徒が主体となった具体的な取組を児童会・生徒会活動に意図的・計画的に取り入れた。

・【町内小・中学校共通】「あいさつ運動」：児童会・生徒会役員が玄関で声かけを行う活動
・【東川小学校】「東小カーニバル」：高学年が低学年を招待して交流する異学年による活動
・【東川第一小学校】「がんばり集め」「やさしさ集め」：がんばりや優しさを見付け認め合う活動
・【東川第二小学校】「ふわふわ集会」：ふわふわ言葉をつかって過ごせるようにする活動
・【東川第三小学校】「ありがとうの木」：頑張りを認める言葉を葉の形の用紙に書き、ありがとうの木に掲示する活動
・【東川中学校】「いじめ防止集会」：ＳＮＳに関わる事例について小グループで話し合い、全校生徒で協議を行う活動
・【小・中学校による交流活動】：小学校の児童会が中学校に学芸会のポスターを提示したり、中学校の学級通信や学年通信などを小学校の第６学年の教室に掲示したりするなど交流を深める活動

成果（○）と課題（●）

○　新たな不登校を生まないために、教員の適切な支援の下、児童会・生徒会が主体的となった集会活動などを企画し、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを進めることができた。

●　不登校の未然防止に向けて、「ほっと」などの各種調査の分析結果を活用した教育相談を継続するとともに、よりよい人間関係の構築に向けた取組を充実させる必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

不登校の傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実
天塩町立天塩中学校
天塩町立天塩小学校・天塩町立啓徳小学校

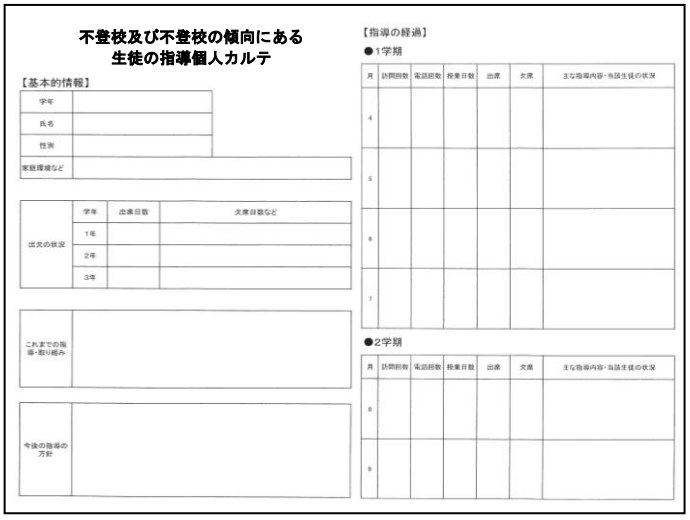
効果的な取組とするためのポイント

不登校の傾向が見られ始めた児童生徒に対して、早い段階で組織的に対応するために、「チェックリスト」や「カルテ」等を活用し、児童生徒の状況を把握するとともに、指導方針や指導内容等について整理し、指導に生かしています。また、スクールカウンセラー等の関係機関と連携したサポート会議を必要に応じて開催し、児童生徒一人一人の状況に応じてきめ細かく対応しています。

取　組　の　実　際

１　「チェックリスト」や「カルテ」を活用した実態把握と指導体制の構築

不登校の傾向が見られた児童生徒に対して、迅速かつ適切に対応するには、生徒指導部を中心とした学校全体での指導体制を整備し、組織的・計画的に取組を進めることが大切である。本推進地域の中学校では、欠席状況や人間関係等について確認する「不登校早期発見チェックリスト」を継続して使用し、生徒の状況を把握するとともに、チェックリストで支援が必要と判断された生徒に対して、担当教員を中心に「不登校及び不登校の傾向にある生徒の指導個人カルテ」に指導の過程や生徒の状況等を記入している。カルテについては、加配教員が定期的に整理し、不登校対策員会や職員会議等において校内で情報共有するとともに、今後の指導方針等を協議して不登校の未然防止に向けた全校での取組を進めている。


不登校及び不登校の傾向にある
生徒の指導個人カルテ

【基本的情報】

学年	
氏名	
性別	
家庭環境など	

出欠の状況	学年	出席日数	欠席日数など
	1年		
	2年		
	3年		

これまでの指導・取り組み	
今後の指導の方針	

【指導の経過】

●1学期

月	訪問回数	電話回数	授業日数	出席	欠席	主な指導内容・当該生徒の状況
4						
5						
6						
7						

●2学期

月	訪問回数	電話回数	授業日数	出席	欠席	主な指導内容・当該生徒の状況
8						
9						

２　関係機関との連携したサポート会議の開催

スクールカウンセラーや町福祉課等の関係機関と連携したサポート会議において、「カルテ」を活用して、当該生徒の状況や指導内容等について共通理解を図るとともに、今後の指導方針等について関係機関から専門的な助言を受けている。なお、関係機関との連絡・調整やサポート会議の運営は、加配教員が行っている。

成果（○）と課題（●）

○　「チェックリスト」や「カルテ」を活用して状況をきめ細かく把握し、教員間で情報共有することにより、不登校の傾向が見られる生徒に対して組織的な早期の対応を行うことができた。

○　加配教員が中心となって校内外の連絡・調整及び会議等の運営を行ったことにより、組織的な指導を行うことができた。

●　効果的な指導に資する助言や支援を受けるために、今後とも、関係機関に対して学校の指導方針等について丁寧に説明する必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

新たな不登校を生まないための魅力ある学校づくりの取組
～いじめ防止・早期発見・迅速な対応～

斜里町立斜里中学校・斜里町立斜里小学校・斜里町立朝日小学校

効果的な取組とするためのポイント

友達関係のトラブルは、不登校のきっかけとなる最大の要因となっている。近年、インターネットの台頭により、複雑化又は潜在化する新たないじめや生徒間の不和が生まれないよう、教職員がこれらの問題について取り組む基本姿勢を十分に理解し、組織的に対応することが大切である。

取　組　の　実　際

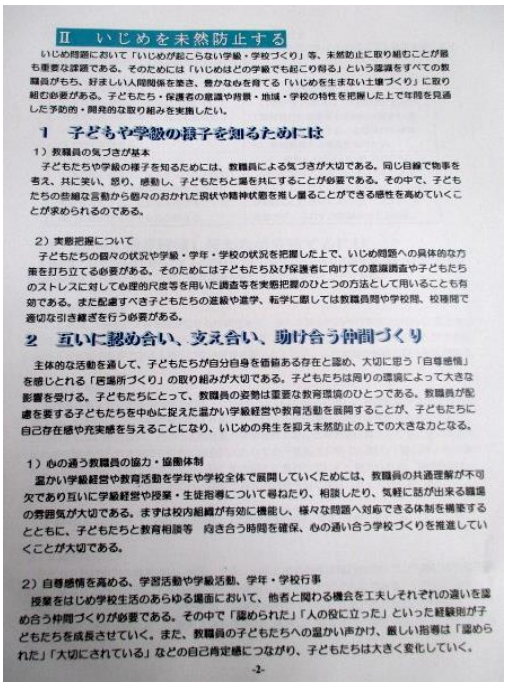
１　いじめ防止・対応ガイドラインの作成と指導及び組織の確立

本校では、中１ギャップ担当者と指導部が協力して「北海道子どものいじめ防止に関する条例」を基に、いじめが起きた場合の対応の在り方等のポイントを具体的に示すとともに、いじめの未然防止、早期発見及び早期対応についての基本的な認識や考え方をはじめとして、いじめの問題を全体として正しく理解するための「いじめ防止・対応ガイドライン」を作成した。

このガイドラインを基に、いじめの防止や正しい対応を実現するためには、組織として体制の整備に努め、校内研修を実施する必要がある。いじめを生まない土壌を形成するための「予防的」「開発的」な取組を、あらゆる教育活動において展開することが必要である。

＜ガイドラインの構成＞

Ⅰ　いじめに関する基本的な考え方
Ⅱ　いじめの未然防止
Ⅲ　いじめの早期発見
Ⅳ　いじめの早期対応
Ⅴ　いじめ問題に取り組む体制の整備



Ⅱ　いじめを未然防止する

いじめ問題において「いじめが起こらない学級・学校づくり」等、未然防止に取り組むことが最も重要な課題である。そのためには「いじめはどの学級でも起こり得る」という認識をすべての教職員がもち、好ましい人間関係を築き、豊かな心を育てる「いじめを生まない土壌づくり」に取り組む必要がある。子どもたち・保護者の意識や背景・地域・学校の特性を把握した上で年間を見通した予防的・開発的な取り組みを実施したい。

１　子どもや学級の様子を知るためには

１）教職員の気づきが基本

子どもたちや学級の様子を知るためには、教職員による気づきが大切である。同じ目線で物事を考え、共に笑い、怒り、感動し、子どもたちと喜を共にすることが必要である。その中で、子どもたちの些細な言動から個々のおかれた現状や精神状態を推し量ることができる感性を高めていくことが求められるのである。

２）実態把握について

子どもたちの個々の状況や学級・学年・学校の状況を把握した上で、いじめ問題への具体的な方策を打ち立てる必要がある。そのためには子どもたち及び保護者に向けての意識調査や子どもたちのストレスに対して心理的尺度等を用いた調査等を実態把握のひとつの方法として用いることも有効である。また配慮すべき子どもたちの進級や進学、転学に際しては教職員間や学校間、校種間で適切な引き継ぎを行う必要がある。

２　互いに認め合い、支え合い、助け合う仲間づくり

主体的な活動を通して、子どもたちが自分自身を価値ある存在と認め、大切に思う「自尊感情」を感じとれる「居場所づくり」の取り組みが大切である。子どもたちは周りの環境によって大きな影響を受ける。子どもたちにとって、教職員の姿勢は重要な教育環境のひとつである。教職員が配慮を要する子どもたちを中心に据えた温かい学級経営や教育活動を展開することが、子どもたちに自己存在感や充実感を与えることとなり、いじめの発生を抑え未然防止の上での大きな力となる。

１）心の通う教職員の協力・協働体制

温かい学級経営や教育活動を学年や学校全体で展開していくためには、教職員の共通理解が不可欠であり互いに学級経営や授業・生徒指導について尋ねたり、相談したり、気軽に話が出来る職場の雰囲気が大切である。まずは校内組織が有効に機能し、様々な問題へ対応できる体制を構築するとともに、子どもたちと教育相談等　向き合う時間を確保、心の通い合う学校づくりを推進していくことが大切である。

２）自尊感情を高める、学習活動や学級活動、学年・学校行事

授業をはじめ学校生活のあらゆる場面において、他者と関わる機会を工夫しそれぞれの違いを認め合う仲間づくりが必要である。その中で「認められた」「人の役に立った」といった経験則が子どもたちを成長させていく。また、教職員の子どもたちへの温かい声かけ、厳しい指導は「認められた」「大切にされている」などの自己肯定感につながり、子どもたちは大きく変化していく。

-2-

【いじめ防止・対応ガイドライン】

２　生徒指導講演会の充実を図る

本校では、「生徒間の不和」を生まないための取組として、友達関係構築のための講演会を実施している。スクールカウンセラーや町民生部保健福祉課と連携して「カウンセリング講習会」「ソーシャルスキルトレーニング」等の学習を定期的に取り入れ、生徒のコミュニケーション能力の向上を目指している。

成果（○）と課題（●）

○　今年度の学校評価において、「話ができる友達がいる」と回答した生徒の割合が97%、「友人関係が良好である」と回答した生徒の割合が94%と高い数値となった。

●　教育相談アンケートや子ども理解支援ツール「ほっと」等の結果及び分析から、より具体的な方策をもって取り組む必要がある。

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

不登校の傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実

音更町立下音更中学校
音更町立下音更小学校・音更町立鈴蘭小学校

効果的な取組とするためのポイント

不登校傾向が見られた生徒への対応方法について、システム化を行うことにより、全教職員が共通認識の下、不登校傾向の生徒の対応にあたることができる。また、生徒会執行部を中心に、学年間の隔たりをなくし、安心した学校生活ができるよう、定期的な異学年交流が行われている。

取　組　の　実　際

１　不登校傾向が見られる生徒の対応のシステム化

・定期的（月に一度）の不登校対策委員会と臨時の不登校対策委員会の実施
・担任による面談及び保護者への連絡と家庭訪問による初期対応の実施
・別室登校が可能な生徒に対して、スモールステップ（保健室→相談室→教室）で教室での生活に向けた支援の実施
・別室登校を行う生徒への主幹教諭を中心とした体制整備

２　引継ぎシートを活用した不登校対策委員会の実施

不登校の生徒に対する指導計画が明確になるよう、月ごとにスモールステップで生徒の目指すべき姿を記載し、教職員間で共通理解を図っている。

生徒の実態に合わせて、「長期目標」を掲げ、毎月「短期目標」、「具体的な手立て」、「振り返り」を記入し、指導の方向性について検討している。

登校を促すための学校としての対応と生徒の変容

学校名	音更町立下音更中学校		
学　級	年　　組		
生徒氏名		性別	男　・女
長期目標			

	短期目標	具体的な手立て	振り返り
４月			
５月			

【下音更中学校で作成した引継ぎシート】

３　生徒会主催の異学年交流の実施

「笛の数だけ集まる」などの絆づくりの活動や、異学年でのドッジボール、定期テスト前の「優しい先輩の学習サポート」など、年間５回の異学年交流を行った。体育祭や文化祭以外に異学年とのつながりをつくる活動を定期的に開催することで、生徒間の人間関係を構築することができ、安心して学校に通える環境を整えることができた。

【絆づくりの活動の様子】

成果（○）と課題（●）

○　不登校の生徒への対応をシステム化することで学級担任の負担を軽減し、不登校の傾向が見られる生徒の早期発見につながり、組織的に適切な教育支援を行うことができる。
○　上学年が率先して異学年との交流を行うことにより、生徒が安心して過ごすことのできる環境をつくることができている。
●　不登校傾向が見られる児童生徒の対応を、小学校においても行い、中学校区内において一貫した取組とする必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

新たな不登校を生まないための魅力ある学校づくりの取組

標茶町立標茶中学校・標茶町立標茶小学校・標茶町立磯分内小学校・標茶町立沼幌小学校

効果的な取組とするためのポイント

生徒会が主体となって「いじめ未然防止運動」や「異学年交流」などの活動に取り組み、互いを尊重し合うことができるよりよい人間関係の構築を図るとともに、生徒一人一人の自己有用感や学校、学級への所属感を高める。

取　組　の　実　際

加配教員と生徒指導部が中心となり、生徒が主体的にいじめ、不登校の未然防止に取り組めるよう指導している。

１　生徒会企画の実施

本校の体育祭は、第１学年から第３学年の生徒が異学年で団を構成し、異学年交流を進めている。また、２学期には、生徒会活動において、第２学年の生徒が中心となり、全校生徒が人間関係を構築する活動を実施した。

２　いじめ根絶の活動

本校では「いじめ未然防止活動」の一環として、平成28年度から生徒会が主体となり、「標茶中学校いじめ根絶宣言」を作成している。今年度は「ほんわか、チクチク言葉」のアンケートを全校生徒に実施し、内容を一新するとともに、ＳＮＳ上のトラブル防止の視点から、標語を作成し、生徒玄関ホールの「いじめ未然防止活動コーナー」に掲示するなどの活動を行っている。

【「いじめ未然防止活動コーナー」の掲示】

３　各種検査の実施と活用

本校では、加配教員が中心となり、「ほっと」の実施、分析を行い、生徒理解を図っている。今年度は各種検査の結果を学年部会で学級毎の傾向を分析し、課題が見られた項目に対しての改善策を協議し、不登校を生み出さない学級風土を醸成し、組織的に不登校の未然防止に努めている。

成果（○）と課題（●）

○　「ほっと」の結果において学校全体として「礼儀」「学業」の数値がともに 53 を超え、他の項目に比べ高い数値を示した。このことは生徒会が主体となり、人間関係を構築する取組を進めたことや、「いじめ未然防止」の取組を進めたことにより、お互いを認め合う人間関係が構築され、その人間関係を基盤として学習を進めていることが考えられる。

○　第１学年を対象とした「学校生活アンケート」において、「中学校生活が楽しい」と肯定的な回答割合が平成 28 年度 61%、平成 29 年度 93%、今年度は 98%と、この三年間で大きく上昇した。

●　「ほっと」の結果において第２学年と第３学年では、「緊張」の数値が 50 を下回り、他の数値と比べ低い数値を示した。生徒は、自分の考えを表明することに苦手意識をもっていると考えられるため、今後は、学校の教育活動全体で、生徒が自分の考えをもち、表現する等の取組を充実する必要がある。

様式５

４　新たな不登校を生まない未然防止の取組

不登校の傾向が見られ始めた児童生徒への早期の対応の充実

中標津町立中標津中学校・中標津町立中標津小学校・中標津町立丸山小学校

効果的な取組とするためのポイント

加配教員を不登校の未然防止、早期発見・早期対応に係る支援チームの中核に位置付け、支援シート、支援計画を作成し、組織的な支援の充実に取り組んだ。また、支援レベルを３段階に分類し、状況に応じて小学校、高等学校、関係機関等と連携し、複合的に登校支援、自立支援に取り組む体制を整えた。

取　組　の　実　際

１　不登校の未然防止、早期発見・早期対応に係る支援

(1)　次の８項目について重点的に取り組み、組織的な指導・支援の充実を図った。

①日常の打合わせ、生徒指導交流日（週１回）を活用した情報共有を行う。

②面談や個別相談を充実することにより、トラブル解消と人間関係スキルの向上を図る。

③複数教員による授業や相互授業参観を行いながら、生徒指導の３機能を生かした授業改善に組織的に取り組む。

④全教職員による教育課程改善会議を開き、自己有用感を高める自主的・主体的な教育課程への改善・充実を図る。

⑤養護教諭、スクールカウンセラーと連携し、多面的な生徒理解の充実に取り組む。

⑥学級担任と学級副担任が連携し、短学活、給食・清掃活動、特別活動の指導の充実を図る。

⑦生徒指導情報を記録し、情報の共有化を図り、組織的指導支援の充実を図る。

⑧課題にフォーカスした研修を実施することにより、生徒理解に基づく支援の充実を図る。

(2)　小学校、高等学校、関係機関等と連携し、次の３つの視点からから複合的に対応の充実を図った。

①不登校及び不登校傾向の生徒の状況や課題を明確化し、支援レベルを３段階に分類した上で支援別シートを作成し、支援チームによる実行性のある対応の充実を探る。

②必要に応じ、関係機関とケース会議を開き、連携チームで支援の方策を作成する。

③当該児童生徒、保護者と面談を行い、思いを受け止め、長期目標、短期目標を設定し、その上で登校支援、自立支援の方策や手立てを当該児童生徒、保護者に選択させ、目標の実現に向けて関係機関と接続・連携した支援の工夫を図る。

成果（○）と課題（●）

○　加配教員を不登校の未然防止、早期発見・早期対応に係る支援チームの中核に位置付け、生徒理解に基づいた組織的な支援を行ったことにより、長期欠席にならずに人間関係の修復やトラブルの解決ができたケースが複数あった。

●　不登校傾向が見られ始めた生徒の背景や要因が、多岐にわたり複合的であるため、改善につながらないケースも多く、一層の取組の工夫が必要である。